
KEEP OUT 5 死の馬

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K E E P O U T 5 死の馬

【Nコード】

N 7 3 3 7 Y

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

美沙の突然の入院に伴い、鴻上支店は2週間の休業となった。けれど自主的に事務所を開けていた春樹の元へ、一人の女が現れ、依頼を持ちかける。

消息の分からない知人を探してほしいと言うものだった。

「これはこの探偵事務所じゃなくて、あんたへの個人的依頼だよ」、
と言う女に困惑しながらも、依頼を受けてしまう春樹。

しかしターゲットの男を捜すうちに、春樹はじわじわと正体不明の

闇に引きずり込まれてゆく。

女は春樹に何を求め、何を植え付けて行ったのか。

春樹、美沙、そして隆也。

この世の辛酸を舐め生きて来た一人の女の出現により、次第に彼らは乱され、出口を見失ってゆく。

最終章へ向けての、静かで残酷な前奏曲。

全24話でお送りします。

第1話 光を追って

十月も終わりだというのに、何てバカみたいに暖かく、世界は光に満ちているのだろう。

女は酔い覚ましの缶コーヒーを、座っていたベンチの端に置くと、自分の世界とは対局にあるような穏やかな街並みをぐるりと見渡した。

車道を挟んだ向かいには、若者で賑わうファーストフード店。

自分が座っているベンチの横には、色とりどりの花を軒下に並べた花屋がある。

全てがしらじらしく陽気で、くすんで腐りかけている自分が滑稽で、嗤いが込み上げてくる。

自分だけが世界の歓喜に背を向けている。

花屋の軒下に、つと、一人の少年が立った。

まるで吸い寄せられるように、店先に並んだ色とりどりの花を見つめている。

女は目だけでその横顔をじっと追った。

少年が無心に花たちを見つめるその表情は、天空から照りつける太陽よりも清純で眩しく見えた。

その透き通るような肌の白さだろうか。

キラキラと亜麻色に光る、絹のような髪だろうか。

それとも、これから花を贈る誰かを想い浮かべて微笑む、その薄紅色の唇のせいだろうか。

目が離せなかった。

女はたぶん、自分が生涯触れることもないだろう清らかな眼差しを盗み見ながら、ひっそりと嗤った。

汚れを知らぬ天使よ。

お前は私の姿など、見えぬだろう。

少年は、店内から出てきた花屋の若い店員に「いらっしやいませ」と声をかけられると、少し恥ずかしそうに何やら質問した。

店員の女が苦笑して首を横に振ると、少年は再び恥ずかしそうに、ひとつ小さく頭を下げた。

そして花も買わずに、すぐ前の車道を横切り、ファーストフード店に隣接するビルに姿を消した。

「お客さん」。また、その人が元気になったら、いらっしやいね」
店員が少年の後ろ姿に掛けた優しい言葉が、心地よく周りに余韻を残していた。

もう少し見ていたかったな。

そんなバカらしいことを思いつつ、少年が消えていったビルを見上げた。

5階建ての古いテナントビル。

看板には、名も知らぬ会社名に混じって探偵事務所の名もあった。

そんな日陰的存在の企業が、近頃はあっけらかんとこんな所に看板を上げているのかと、女は少しばかり驚いた。

ポカンと無心にそのビルを見上げている女の前を、若いカップルが、嫌なものでも見るように一瞥して通り過ぎてゆく。

咄嗟に二人に鋭い視線を投げつけて見たものの、女は再び物憂げな目つきに戻り、空き缶もタバコの空箱もそのままに、のっそりとベ
ンチから立ち上がった。

春樹は3階の事務所の鍵を開け、電気を付けてから通りに面した窓

を全開にした。

美沙が入院中の2週間は事務所を閉めるように美沙に言われていたが、溜まった細かな事務処理や資料の整理、これからの段取りが気になって、とても家にじつとしていられなかった。

「美沙が退院するまで、僕がちゃんと留守番してるから。大人しく治療受けてきてね」

美沙が入院した日。つまり今から5日前、春樹はそう言って市立総合病院をあとにした。

淡々と言っては見たものの、美沙のまさかの入院は実のところ、春樹をとて不安にさせた。

その一週間前から急に体調を崩し、青い顔をしていた美沙は、「ただの風邪よ」と強がっていたが、その数日後の夜いきなり「ごめん、軽い急性膵炎でちよつと2週間ばかり入院することになった」と、病院の外来から電話をくれたのだった。

春樹は不安ですぐに美沙の元に駆けつけたが、MRIやエコー、その他諸々の検査等で結局その日は会えず、その代わり美沙からの手紙を看護師から渡された。

腹の立つほどそれは素っ気なかった。

『春樹へ』

- ・事務所は閉めていい。事務処理の遅れは、あとで何とかする。
 - ・完全看護だから、一人でなんとかなる。心配はいらない。
 - ・広島の母親は心配性だから、連絡しないでほしい。
 - ・あとは長期休暇だと思って、2週間のんびり遊んでちょうだい。
- - 美沙より』

手紙などではない、単なる指示書だ。

春樹は心底がっかりし、何かしおらしい事が書かれているのかと期待した自分にもガッカリした。

“私はただの上司。それだけだよ”

美沙はそう伝えようとしているのだろうか。

2カ月前、春樹の秘密を美沙が、友人の隆也に打ち明けて以来、美沙の春樹への態度は以前にも増して事務的になった。

人の肌に触れるとその相手の記憶、感情を読みとってしまうという春樹の特殊能力。

その秘密を勝手に隆也に打ち明けてしまったという負い目なのだろうか。

けれどもそのお陰で春樹は隆也という本当の意味での友人を得られた。

秘密を知っても尚、春樹への態度を変えず、心の内を気負い無く見せてくれる、奇跡のような友人を。

美沙にも「感謝してる」と伝えたはずなのに。

なぜ美沙は必要以上に自分を避けるのか。

『美沙、避けなくても貴方には触れない。ぜったい心など覗かない』
面と向かって自分は、美沙にちゃんと伝えなければならないのだろうか。

今さら滑稽だが、そうすれば美沙との関係が今まで通り保てるなら、そうしようとしてまで春樹は思った。

死んだ兄の恋人。姉のように自分を見守ってくれる人。厳しい、けれど尊敬する職場の上司。

それ以上では無いはずなのに、相も変わらず春樹にとって一番怖いのは、美沙が自分から離れていってしまうことだった。
化け物のような能力を持つ、自分から。

不意に入り口のドアがコンコンとノックされた。

春樹はハツとしてドアに目をやる。

アポ無しで客が来ることは今までほとんど無かった。

薫だろうか。それともその兄、最近よく訪れるようになった局長の立花聡だろうか。

「はい、どうぞ。開いてます」

春樹が声を掛けるとドアはゆっくり押し開けられ、やがて様子を伺うように顔を覗かせたのは、40前後と思われる、化粧の濃い、気だるい目をした女だった。

女はアイラインとシャドウで沈着した目元に皺を寄せ、目を凝らすようにじつと春樹を凝視しながら、ゆっくりと後ろ手にドアを閉めた。

“水っぽい”

女を包む、ほの暗い隠微な空気の揺らぎが、春樹にそんな印象を与えた。

「探偵事務所だと思って来たんだけど。なんだ・・・坊や、ひとりなの？」

そのねっとりとしたローズレッドの唇から出てきた言葉は、少しかり春樹の自尊心を刺激した。

第3話 依頼人の女

「ご依頼ですか？」

春樹はその少々無礼な物言いの女に、努めて冷静に返した。

「あら、やっぱり探偵事務所だったの？ 可愛い坊や一人だったんで、学習塾にでも入り込んだんじゃないかと思った」

女は玉虫色のラメの入ったロングスカートを揺すり、ぼつてりとした唇をゴムのようにひき伸ばして笑った。

どこか陰気な笑いだ、と春樹は感じた。ムスク系の濃厚な香りが、部屋の中に広がってゆく。

苦手だな。

春樹は一瞬、本能的にそう思ったが、もしも依頼人ならば大事なお客様だ。

丁寧な対応をしなければ、と春樹は背筋を伸ばし、女を応接用のソファに座らせた。

「所長の戸倉は暫く不在なので、実際の業務は休止中なんですけど・・。もしお急ぎでしたら、本社の方に取り次がせていただきます」

「あら、坊や、本当にこの社員さんだったの？ こっそり入り込んだ学生さんじゃなくて？」

「・・・いえ」

春樹はムツとする気持ちを抑えて自分の名刺を差し出した。

実際の年齢よりも、自分の外見が幼く見えることを春樹は充分承知しているし、今までにも春樹の若さに意外そうな顔をした依頼人は多かったので、別段気にもならなくなっていた。

しかし、こんなにあからさまにそれを口にされたのは初めてで、そこに含まれる僅かな嘲笑が、少々春樹の坎に障った。

「天野春樹君・・・か。いい名前ね。じゃあ、春樹君に調べてもらつちやおうかな。別段急がないし」

女はトロンとした目で正面のソファに座る春樹をじっと見つめた。ムスクでは隠せない、アルコールとタバコと生活の匂いが重く春樹の周りに漂った。

「この鴻上支店では、行方調査専門にしています。それ以外の調査でしたら、本社扱いになります・・・」

「それなら問題ないわ。人を捜してほしいのよ。男の人」

「そうですか」

言いながらも春樹は、断る理由をどこかで探している自分に気付き、戸惑った。

「わかりました。・・・お急ぎで無いと言うことでしたら、所長の戸倉が戻りましたら、改めてご連絡させていただきます」

「あんたが居るじゃない」

「え？」

「あんたは何にもできないお人形じゃないんでしょ？ 探偵さんなのよね？ それともやっぱりこの事務所の、ただのお飾りなの？」

女の目が少しばかり凶暴に鋭く光った気がして、春樹はゾクリとした。

けれども、よくよく考えれば女の言葉はどれも間違つてなどいない。名刺を出し、用件を聞いておきながら、支店へ行けだの、所長が戻るまで待てだのと言った自分の対応は正しいとは言えない。

しかし実際問題、自分一人での契約や調査は経験が無く、自信も無かった。

きつと美沙も快く思わないだろう。

「受けてよ。別に急がないしさ」

春樹の戸惑いを察したのか、女は少し口調を和らげて再びそう言った。

「では、所長に連絡しますので、明日まで待つて頂けるでしょうか」
「その必要はないよ。あんたに依頼するから」

「・・・え？」

「立花探偵事務所でも、戸倉って人でもなくて、あんた個人と契約を交わすよ。あんたが探して頂戴、あの男を。金は全額あんたに直で払うからさ」

春樹はとっさにその意味が理解できず、答えに窮して女を呆けたように見つめた。

仕事としてやることと、個人としてやることと、この女にとって何か意味合いが違うのだろうか。

「ポケットとしてないで書き留めてよ。今から探す男の事、言うから。名前は町田健一郎、43歳・・・」

春樹は慌ててメモパッドに女の口から流れ出る情報を書き留めた。

けれどそれは名前と年齢、風貌、以前の勤め先以外に参考となるものは何もなく、“ただの知り合い”程度の、漠然とした情報だった。
「別に逃げ回ったり、やばい感じの男じゃないから、すぐに見つかると思うよ。見つけたらすぐに教えてよ。金はあんたの言い値でいい。あ、そうだ、あたしのケイタイの番号言うから、あんたも教えてくれる？ 名刺には事務所の電話番号しか書いてないもん」

「・・・はい。番号は教えますが、契約書は一応書いて貰ってもいいですか？」

なぜ僕個人にこだわるのだろう。

いぶかりながらも春樹は自分の携帯番号をメモに書いて渡し、女に調査依頼書の記入を促した。

実際、個人的に仕事を請け負うなど有り得ない。春樹は当然、事務所の仕事として依頼を受けるつもりでいた。

女は「面倒くさいね」といいながらもペンを取った。

名前・・・藤川咲子。年齢・・・39歳。

そのあと現住所、電話番号、勤め先。

春樹はじつとそれを静かに目で追った。

女、藤川咲子の香水は少しばかり強すぎて、頭がクラクラする。

39歳か。もう少し上かと思っていた。

そんなことを思いながら咲子の手元を見ると、その動きが一瞬止まった。

『【調査対象者とのご関係】 - (任意)』の項目だ。

再びサラサラと動き出した手が記した文字を見て、春樹は戸惑った。

・・・愛した男、憎い男。探し出して殺してやる。・・・

春樹の表情を感じ取ったのか、藤川咲子はニヤリと笑い、わざとらしくその文字にゆっくり二本線を引いて消した。

からかわれた！

春樹がそう気付いて咲子に視線を合わせると、咲子はもう興味も無さそうに「こんなもんでいいでしょ？」と言い捨て、ボールペンを書類の上に転がした。

「あの子、可愛いですよ。毎日面会に来る、色白の草食系男子くん。最初見たとき高校生かと思いました。まさか戸倉さんの部下とはねえ」

点滴の準備をしながら、美沙の担当の若い看護師、北村が言った。

ほんの少しぼつちやりしたその看護師は、春樹を気に入ったらしい。

「ああ、春樹ね。かわいいでしょ？ でも手を出しちゃだめよ。見た目と一緒に、まだほんの子供なんだから」

「あら、ダメですか。ざーんねん。でもあんな部下がいたら仕事も楽しいでしょうね。いいなー、戸倉さんが羨ましい」

たぶん本気でそう思っているだろう北村をちらりと見ながら、美沙はやっぱりと口元を緩めた。

外見にしる何にしる、春樹のことを褒められると自分のことのように面はゆく、つい嬉しくなってしまう。

離れていればいるほど、愛おしさを痛感する。

距離を保たなければと思い、『見舞いにはあまり来なくていい』という旨の手紙を書いたのだが、当の美沙が、早くも春樹のいない時間の寂しさに参りつつあった。

手紙を受け取ったにもかかわらず、この5日間、春樹は一日一回、必ず病院に顔を出してくれた。

最初の日は、あまりに心配そうな顔をするので、『絶食と点滴と投薬だけで、ちゃんと治るから』と、懇々と説明してやらねばならなかった。

次の日も、その次の日も、顔を出してはくれたが、食べ物差し入れも出来ず、他の患者の手前仕事の話も出来ず、春樹はいつもほんの半時間でソワソワし始める。

そして結局最後はぎこちなく「お大事にね。また来ます」と、小さく言って、帰って行くのだ。

ねえ、もう少し居てよ。何も話さなくていいから。

喉まで出かかった情けない言葉を飲み込んで、美沙はいつも自嘲する。

少年に触れられず、苦しいとき助けることも出来ず、誤解を与えて傷つけるだけならばいっそ、手放す方がいい。

いつか離れなければならぬならば、お互いにとって早いほうがいい

い。

答えは出ているのに、いつもそれを先送りにする。
まだいい。もう少しこのままで、と。

・・・春樹、明日も見舞いに来てくれるかな。

今まで仕事で飽きるほど毎日顔を合わせて来たというのに、少しでも離れたらこれだ。

自分のこらえ性の無さに心底呆れ、美沙は苦い笑みを浮かべた。

第3話 優しい蟻

「へー、春樹ひとりで依頼を受けたのか。で？ どんな調査？ 大変そう？」

隆也は身を乗り出し、春樹に好奇心いっぱい目の目を向けてきた。

春樹はうつかり喋ってしまったことをひどく後悔し、自室の天井を仰いだ。

予備校の帰り、いつものようにふらりと春樹の部屋へ遊びに来た穂積隆也は、本日ビール持参だった。

また母親と派手に喧嘩でもしたのだろう。

隆也が酒を飲むのは、そんな可愛い憂さ晴らし目的の事が多かった。ほんの少しアルコールが入ると色白の頬が赤くなり、目が潤んでくる春樹を、隆也はいつも「女の子みたいだ」と笑う。

それが悔しくて平気な振りで飲み続け、結局いつも気分が悪くなり、突っ伏して再び隆也に笑われるのが常だった。

穂積隆也。酔うとタチの悪い悪友。そして春樹にとって唯一無二の掛け替えのない親友。

春樹の秘密を知って尚、今までと変わらず付き合ってくれる、大切な友達だった。

「ほら、蟻だ。蟻だと思えばいいさ」

秘密を知ったあとで隆也はそう言った。

「アリ？」

「そうだよ、蟻はさ、言葉の代わりに触覚を触れあわせて心をやり取りするんだ。春樹もそうさ。でっかい蟻。残念だなー。俺もそんな能力があったら、内緒の話とか出来るのにさ」

そう言いながら、ふざけて春樹に触れてきた友人の温かい手から読み取ったのは、本当に無数のアリだった。

春樹は可笑しくて可笑しくて、泣き笑いしながら隆也に抱きついた。そして再び隆也から流れ込んできた感情は、無数にじゃれ合う蟻と、青く澄んだ空と、『春樹、元気出せ』の想い。

春樹はその時、この友人だけは決して失いたくないと強く思った。

その無二の親友にも、それなりに欠点はある。

探偵業が気に入らず、事あるごとに「そんな仕事やめて、進学しろよ」と春樹に無理強いするくせに、興味だけはあるようで、やたらと仕事の話を聞きたがる。

酒でぼんやりしていたこともあり、つい口を滑らせてしまった本日の依頼の話に、隆也は喜々として飛びついてきたのだった、

「内容なんて言えるわけじゃないか。依頼人のプライバシーだ」「いいじゃん、絶対秘密にするからさ。どうせ春樹一人じゃ調査出来ないし、本社に回すんだろ？」

「いや・・・僕一人でやってみようと思うんだ」

「マジで？ 美沙さん、承知か？」

「美沙にはあとでちゃんと説明する。今は心配掛けるといけないから、内緒で進めるけど。それに・・・依頼人が、そうしてくれって言っただ」

「依頼人が？」

「うん。出来れば僕個人に依頼したいって」

「えー……。それって・・・」

隆也は小さなテーブルに更に身を乗り出し、目を輝かせた。

「事務所通さない、直の仕事？ マージン丸儲け？」

「嫌らしい言い方するなよ。一応事務所を通す形で契約書を書いて貰ったし。ただ、気持ちの問題だよ。依頼人にそう言われたら、僕がしてあげなきゃって思うし、何かミスした時は、僕個人が責任を

とればいいし」

「もうひとついいことがあるぞ」

隆也はニヤリとして春樹の目を覗き込んだ。

「俺が手伝ってやれる」

「はあ？」

春樹は冗談じゃないとばかりに、おもいきり渋い顔をしてみせ、「もう帰れ、酔っぱらい！」と、隆也のジャケットをその頭にパサリと被せた。

翌日の朝、春樹は町田健一郎の調査にあたる前に、美沙の病院にちよつとだけ顔を出すことにした。

バスを降りると、たいして資料も入っていないファイルケースを抱えながら、春樹は病院前でいつものようにちよつとだけ気合いを入れた。

若い女性ばかりの四人部屋にいる美沙を見舞うのは、春樹にとって、けっこう気まずいものだったのだ。

青い顔でTVを眺めている見知らぬ女性の横で、これまた点滴につながれたパジャマ姿の美沙を前に、何を話したらいいのか分からない。

ソワソワする春樹に、美沙はいつも「もう、来なくていいのに」と苦笑するのだ。

それでも、春樹は必ず見舞いに行った。行って何を話すわけでもないのだが、春樹が顔を見せたときに一瞬見せる、あの笑みがどうしても見たかった。

美沙の病室があるフロアのナースステーションをちらりと覗くと、見知った看護師が笑いながら手を振ってくれた。

軽く会釈をして通り過ぎた春樹だったが、少し行ったトイレの前で、珍しい人物の背中を見つけ、ドキリとした

高身長でスレンダー。

ほんの少しロマンスグレイの入ったその後ろ頭は、誰のものかすぐ分かる。

「立花局長？」

春樹が声を掛けると、立花聡はハツとしたように振り返った。

「ああ、春樹君。君もお見舞い？」

その口元から誰からも好感を持たれそうな穏やかな笑みがこぼれた。関東にいくつも支社を持つ、立花フランチイズ探偵社のトップ。社長ではなく、親しみと敬意を込めて皆が「局長」と呼ぶ、立花聡その人だ。

弟である薫同様、よく美沙と春樹の鴻上支店にふらりと立ち寄るが、なぜか聡が来た時だけ春樹はソワソワする。

美沙の目が、話し方が、笑顔が、心なしかいつもより華やいで見える。

薫に対するフランクなものと違う、特別なものを感じていた。

美沙が尊敬する局長なのだからと割り切っているはずなのに、それでもザワザワとしたものが春樹の心臓あたりでうごめく。

春樹自身、その不快で不可解な感情にいつも戸惑わされていた。

その「戸惑いの元」が、今、少しばかり不安げに春樹の前に立っている。

いつも聡明で堂々としている局長らしくもなく、見知らぬ土地で迷子になった子供のようだ。

「春樹くん。ああ、よかった。なんというか・・・ここまで来てから気がついたんだが、女性の見舞って、初めてでね。いきなり病室に入ってもいいもんなんだろうか。病室はきつと女性ばかりだろ

うし、・・・やっぱり帰ろうかって、ずっとここで迷ってたんだ。君が来てくれて本当に良かったよ」

聡は完璧とも言える体型をシルバークレイの仕立ての良いスーツに包み、涼やかな目元を細めて安堵の笑みを春樹に向けた。

新入りで下っ端で、自分の子供くらいの年齢の春樹に対し、自分の弱みを取り繕うこともしない。

本当の心根が強いからこそ持ち得る、大人の優しさ、包容力が感じられる。

春樹が逆立ちしたってかなわない。

自分が女だったら、きっと心惹かれていると思える、大人の男の魅力だ。

春樹の中の何かが、今もまた、ザワリと揺れた。

第4話 意地悪な虫

「君も美沙さんのお見舞いだろ？ 一緒に病室に行って貰えると嬉しいんだけど」

立花聡は、哀願するように春樹に言った。

知的で涼やかな40過ぎのこのボスは、そんな心細そうな表情を作っても不思議と様になる。

「いいですよ」

春樹は聡を導くように、病室に向かって歩き出した。訳もなく、胃が重苦しい。

「なあ春樹君、知ってたか？ この病院って見舞いに花を持って行っちゃいけないんだってね。さっきナースセンターで注意されたから、持ってきた花預けてきたよ。俺さあ、見舞いって言ったら花だと思ひ込んでんだ」

きまり悪そうに言う聡に、春樹はわざと素っ気なくポツリと言った。「知ってますよ。最近は特に衛生管理が厳しくなって、ダメみたいです。この病院だけじゃなく」

「そうなのか。知らなかったなあ」

ほんの少しの罪悪感を抱きながら、春樹はチラリと聡を見た。

実のところ春樹も偉そうに言える立場ではない。

食べ物の差し入れは出来ないのに、美沙に花でも買って行ってあげようかと、少しドキドキしながら事務所前の花屋を覗いたのは昨日のこと。

そこで初めて、『あの病院は、お花を持っていけないはずですよ』と花屋の店員に教わったのだ。

「607号室。ここだね」

美沙の病室の前まで来て、聡は立ち止まった。ちよっと気恥ずかしそうに春樹に笑って見せたあと、聡はゆっくりスライドドアを開ける。

手前の二つのベッドはカーテンが引かれていたが、窓際のベッドはいずれも開け放たれ、その一つで、薄ピンクのパジャマを着た美沙が、退屈そうに雑誌をめくっていた。

けれどふとドアに目を向けた美沙は聡を確認するやいなや、あたふたと居住まいを直し、少女のように頬を赤らめた。

春樹には、そう見えた。

「立花局長、どうしたんですか。・・・びっくりするじゃないですか」

美沙がうわずった声を出すと、聡もバツが悪そうに小さくなり、「いや、近くに来たもんで、ちよっとお見舞いにと思っただ。・・・ごめん。迷惑だった?」

いつもの風格はどこかへ消し飛び、まるで何かを失敗して反省している中学生のようだ。

春樹は静かに少しずつ後退し、それでも美沙がこちらに視線をよこさないのを確認すると、そのままクルリと踵を返し、病室を出た。後ろで美沙が「春樹?」と呼んだような気がしたが、立ち止まりもせず、僅かに消毒液のする廊下を突っ切り、エレベーターに滑り込んだ。

別に何が気に入らない訳ではないし、ましてや怒っているわけでもない。

ただザワザワと心臓あたりで蠢く虫のようなものが、“外へ行こう”と促すのだ。

“ほら、外の空気を吸えよ。お前がここに居たって仕方がない。”

何度お前が来たって、美沙はあんな表情を見せやしないだろう？”

春樹は調査資料を入れたプラケースを握りしめたまま、風の強くなつた屋外へと飛び出した。

自分がここにいる理由はない。

自分がしなければならぬのは仕事だ。依頼を受けた仕事。

春樹の調査報告を待っている依頼者が居る。だから町田健一郎を捜すのだ。

今はただ、それが春樹の心の寄りどころだった。

咲子がくれた町田の情報は本当に少なく、以前彼が努めていた会社の名刺一枚が全てだと言つてもよかった。

町田は、咲子が勤めているクラブと同じ区内にある、中小証券会社の営業マンだった。

一年半前ひよっこり咲子の店に現れ、馴染みの客になったが、半年前に急に姿を見せなくなったという。

噂では会社を辞めてしまったと聞いたが、出来れば今現在の所在を知りたいのだと咲子は言つた。

依頼を受けたその日、

「差し支えなければ、町田さんを探す理由を教えてくださいませんか？

どんな些細な事でも手がかりにしたいんです」と春樹が訊くと、咲子は気だるい目を細めて、「差し支える」と言つた。

そしてそのあと、自分がふざけて書類に書いた《探し出して殺してやる》という文字を、ボールペンでカシヤカシヤと真っ黒に塗りつぶしながら、「元氣でいるか、知りたいだけよ」と、ポツリと言つたのだ。

ただ、もう一度会いたい。

たぶん、それが本心なのだろうと春樹は感じた。

町田健一郎を捜し出して、咲子に会わせる。

それが出来れば、この咲子の周りに漂う、粘り着くような暗色のカーテンを取り払うことができるのかもしれない。

最初は苦手な女だと感じたが、肌に触らずともビリビリと電気のように伝わってくる、咲子の負の感情が、春樹を突き動かした。

“ 何かに似ている ” と感じたが、それが何かは分からない。

とにかく面倒くさい自分自身の問題はひとまず忘れてしまおう。

今はこの与えられた課題を全力でこなし、一人の人間の願いを叶える、それだけに集中しようと春樹は自分に言い聞かせた。

第5話 町田

病院を出てから一時間後、春樹は町田健一郎が勤めていた水島証券の本社ビルの前に立っていた。

個人投資家相手のリテール営業が中心の中小証券ということもあり、自社ビルもわりと小ぢんまりとした印象だ。

先だって電話で、町田が半年前に辞めたことは聞きだしてあったが、さすがにそれ以上は踏み込めなかった。

正攻法としては正面から出向き、彼の顧客を装って情報を聞き出すのが一番だと思ったが、どう転んでも高校生にしか見えない春樹に、それは無理だった。

他に手もなく、春樹は幼さを逆手に取ってみることにした。

「え？ 町田さん、会社辞めちゃったんですか？ どうしよう、せっかくお金を返せると思ったのに。あの・・・自宅とか教えて貰えませんか？」

春樹は1年前、岡山からこの街に2、3日遊びに来た事のある少年という設定を作り出した。

JRの駅前で全財産の入った財布を無くした事に気付いた自分は、親切な町田に助けられ、帰るための金を貸してもらった。町田はこの会社の名刺を一枚だけ春樹に渡し、次にこの街に来たときでいいよ、と、笑いながら言ってくれたのだと、受付の女性に話したのだ。

「へえ、町田さんが？ ああ、でも、あの人なら有り得るな。すつごく優しいから」

女性社員は思い出すようにやんわり笑ったあと、休憩を入れようとしていた40がらみの太った男性社員を捕まえ、「話を聞いてやつ

て下さいよ、部長」と言つて春樹を紹介した。
男性社員の胸には“営業部長 河田”とある。
春樹の代わりに女性社員があらましを説明してくれると、河田は懐かしそうに目を細め、「町田らしい」と呟いた。

河田は事務所の隅に置いてあつた丸椅子を春樹にすすめると、自分も向かい側に座り、懐かしそうに話し始めた。

「あいつはそんなところがあつたよ。困った人を放つとけないタイプでさ。自分に時間がない時だつて、他人に時間を割いてやれる奴なんだ。そう言えば、俺もいろいろ愚痴を聞いてもらったな。たぶんね、君に貸したお金だつて、返つて来なくていいと思つてたと思うよ」

どうやら、春樹が思いつきで作つた設定は、偶然にも町田の人間性に沿つていたようだった。

「だけど半年前に急に会社を辞めちまつて、それ以来ぶつたり消息が消えちゃつてね。マンションも引き払つてるし、実家とも連絡が付かないし。保険等の事務手続きが終わったあと、気がついたら、だれも連絡先を知るものは居なかった……って感じなんだ」

半年前に消えた。

咲子の前からだけでなく、この街から町田は消えたのだ。

難しい調査になりそうな予感がして、春樹は少しばかり気が重くなつた。

念のために実家の住所と電話番号を訊いた後、出入りしていた場所があれば教えて欲しいと願ひ出た。

けれど河田の口から出てきたのは、何のことはない、『かれん華蓮』。
咲子の勤めるクラブの名だった。

「まあ、君にはまだ縁のない世界だな、青少年」

河田は最後にそう言って笑った。

春樹はそのでっぷりと太った気のいい営業部長に丁寧に礼を言って、本社ビルを出た。

振り出しに戻ったかな。

春樹はどこか冬の匂いのする歩道で一つ、ため息をついた。

そこに勤めている咲子自身が何の情報も持っていないのだから、当然収穫は望めないだろう。

けれど、無駄だと思っても他に手は無かった。

もしかしたら咲子以外のホステスに、何か僅かでも情報を貰えるかも知れない。

春樹は、店が開店準備を始める時間を待って行ってみることにした。調査中、咲子に出会わなければいいな……。そんなことを思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7337y/>

KEEP OUT 5 死の馬

2011年12月2日20時46分発行